



むすんで、うみだす。

# Lib.

京都産業大学  
図書館報  
Vol. 45, 増刊号  
(Dec. 19, 2018)

第14回京都産業大学  
図書館書評大賞

## 入賞作品掲載号

入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品および講評	
<大賞>	4-5
<優秀賞>	6-11
<佳作>	12-21
アンケート	22
統計	23
概要	24

# 入賞者発表

第14回京都産業大学図書館書評大賞には70篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

各賞ごと氏名の50音順

## 大賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
まつうら ともき 松浦 知輝	経済学部 経済学科 3年次生	疑問の発芽を育む 『カエルの楽園』(百田尚樹著)

## 優秀賞

いわした れん 岩下 恋	経営学部 経営学科 3年次生	心の慟哭 『虚無感について：心理学と哲学への挑戦』 (ヴィクトール・E.フランクル著；広岡義之訳)
なかや ゆうた 中矢 悠太	文化学部 国際文化学科 3年次生	SFと技術革新の先に 『旅のラゴス』(筒井康隆著)
なわた みら 縄田 美蘭	理学部 宇宙物理・気象学科 1年次生	『墮落論』の源流 『日本文化私観』(坂口安吾著)

## 佳作

いした たける 石田 健	文化学部 国際文化学科 2年次生	異化された京都ですれ違うラブストーリー 『夜は短し歩けよ乙女』(森見登美彦著)
うめざき さな 梅崎 咲奈	文化学部 国際文化学科 3年次生	最善ではなかった最善説 『カンディード』(ヴォルテール著；斉藤悦則訳)
はやし ゆうすけ 林 祐輔	文化学部 国際文化学科 3年次生	無色という色 『限りなく透明に近いブルー』(村上龍著)
ひとみ まな 人見 茉那	法学部 法律学科 2年次生	仮面を守る 『マスカレード・ホテル』(東野圭吾著)
もりもと ともゆき 森本 智之	文化学部 京都文化学科 3年次生	現代に蘇る昔話 『むかしのはなし』(三浦しをん著)

# 選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 西村 佳子

今年度の京都産業大学図書館書評大賞イベントは、7月23日、第120回芥川賞受賞作家である平野啓一郎氏の講演「私の読書遍歴」と共に幕を開けた。盛夏とはいえ、38度後半という猛暑日の熱が引かない過酷な条件で開演時間を迎えることとなったが、Lib. コモンズ（図書館ホール）は100名の聴衆で埋まり、平野氏と学生達の対話によって、外界とはまた違う熱気で包まれたことは、たいへん喜ばしいことであった。平野氏のご講演内容については、京都産業大学図書館報 Lib. の vol. 45, no. 2 に掲載されているので、図書館入り口で、ぜひ手に取っていただきたい。

平野氏は、作家やその著作について紹介し語ることの効用について、「作品について、世代を超えて対等に語り合うことができること」を挙げておられた。紹介し語った内容を文章に起こせば、すなわち書評である。実際に、平野氏は、20代前半の若い時代に、三島由紀夫やボードレールやランボーについて語ったことがきっかけとなり、大江健三郎氏をはじめとする作家や文化人の方々と、世代や立場を超えて作品について語り合う機会を得たそうである。

大賞受賞の経済学部3年次生・松浦さんは、百田尚樹著『カエルの楽園』について、楽園とは受け身の国民が作る無風の社会ではない、平和に見える社会であっても常に批判的精神が重要である、という点に共感を示した。松浦さんの文章からは、書評と言うにふさわしい批判的精神を感じることができた。優秀賞は経営学部3年次生・岩下さんのヴィクトール・E. フランクル著『虚無感について—心理学と哲学への挑戦』、文化学部3年次生・中矢さんの筒井康隆著『旅のラゴス』、理学部1年次生・縄田さんの坂口安吾著『日本文化私観』を対象とした書評が選ばれた。それぞれ、「生きるための力」「文明の盛衰」「墮落論と俳諧師」というテーマを設定し、作品に対する感想だけでなく自らの解釈を披露し、まだ作品を手にしていない者に「読んでみよう」と思わせる力をもった書評であった。

さて、今年度の書評大賞には70篇の応募があり、そのうち66篇が第一次選考の対象となった。第一次選考は書評大賞選考委員会の委員（教員と事務職員）が2名1組計5組あたり、それぞれ3段階で評価した。その結果、28篇が第二次選考に残った。第二次選考は11名の書評大賞選考委員が日本語の体裁、内容の要約、批評する力という観点から審査を行い、大賞1名、優秀賞3名、佳作5名を選んだ。作品に対する深い洞察と的確な表現力によって展開された書評が二次の選考を通過し、全員一致で入賞作9篇が選出された。

書評の効用のひとつは、前出のように、世代や立場を超えて同じ作品について語り合うきっかけとなり得ることである。今回、瑞々しい感性で書かれた書評により、新たな作品と出会った人々と、評者でそのような機会が持てれば幸いである。最後になったが、お忙しい中選考に携わってくださった書評大賞選考委員の先生方、図書館職員の方々、そして、ご協賛頂いた京都産業大学同窓会、丸善雄松堂株式会社、株式会社紀伊國屋書店の皆様にあらためて厚くお礼を申し上げる。



書名：『カエルの楽園』

著者：百田尚樹

出版社・出版年：新潮社，2017

### 「疑問の発芽を育む」

国語辞典によると楽園とは、「心配や苦勞が無く、楽しく過ごせる場所」だそうである。しかしこの説明は、楽園をいささか身近で平凡なものとして捉えすぎているのではないか。

この本の著者は、百田尚樹氏である。この本を知らなくても、近年映画化された『永遠の0』、『海賊と呼ばれた男』なら目にした事がある方も多いただろう。この物語は、「楽園」とは何か、を問う一冊である。

この物語の登場人物は、カエルを中心とした生きものである。物語は、主人公のソクラテスの視点を借りて進み、各登場人物との会話を主とする読みやすい寓話で書かれている。物語は、今までの理不尽な生活に耐えかねたソクラテスと 60 匹の仲間が、安息の地を求め旅に出る所から始まる。しかし道中は厳しく、命からがら心安らぐ場所に着いた時、ソクラテスと友人ロベルトのたった二人となっていた。たどり着いた先は、ナパージュという国だった。周囲を回ってみると、この国は、二人に、いや、カエルにとってのまさに楽園だった。ナパージュの国民に平和の理由を聞くと、国民が、奇妙な戒律、「三戒」を守り続けているおかげだと言われる。三戒によって平和が守られている、三戒の効用に感銘を受けた二人は、自身の国に三戒の教えを持ち帰るべくナパージュに滞在する。外界からの来訪者二人の滞在によって見えてくるナパージュの真実と、物語後半から最後にわたる怒涛の展開が本書の見所だ。加えて、国民に国一番の物知りと尊敬され、朝と夜に集会を開いて自らの考えを国民に植え付けるデイブレイク、陰から真にナパージュを守っているワシのスチームボートなど、実在するかのような登場人物も魅力のひとつである。

中盤では天敵、ウシガエルが出て来てナパージュを危機に陥れる。ナパージュ最強のハンニバル兄弟がこれを退けるが、戦う力を持つことは三戒を破る恐れがあり、これを良く思わないデイブレイクは信仰の力を使い、ハンニバル兄弟を追い詰めて行く。元老会議は、ウシガエル対策を考え始める。議論の末に、若い元老からスチームボートと協力しつつ、ハンニバル兄弟を抑止力とする案が出た。しかし、年老いた元老やデイブレイクの妨害により、不発に終わってしまう。その結果、大量のウシガエルがナパージュに押し寄せて来る。抵抗しないナパージュ側は少しずつ、けれど確かに領土を奪われていく。

この物語の登場人物等には、実は、ナパージュは日本、ソクラテスは難民、スチームボートはアメリカ、ハンニバル兄弟は自衛隊、ウシガエルは日本の周辺国、というモデルが存在する。視点を変えて、有名な四人のジレンマの考え方で状況と捉えると、ウシガエルの行動は如何にもありそうなことであり、ナパージュ側の行動には、著しく危機管理能力



が欠けている、と判断されるだろう。

『カエルの樂園』を読み終わったとき、私は面白かったという印象と共に、ある種の後味の悪さ——不快感を持った。この不快の理由は、本書は、誰にでも気軽に読める物語でありながら、著者からの誘導が強いからだと感じた。小説の良いところは、物語の流れの中のそこここから、著者の思想が垣間見えるところだと思う。それを、読み手それぞれが、自由に受け止めることができる。つまり、著者と読者との距離感が大切であり、決して著者は、自らの考えを国民に植え付けるデブレイクであってはいけない、と思う。

この物語の場を借りて、著者は憲法9条を取り巻く現状への警告をしたかったのかもしれない。だからと言って、この本を読んで9条、憲法改正と騒ぐのは御門違いだ。読み手それぞれが自由に受け止め、思い巡らせば良い。

では、大事なことは何か。この物語の登場人物の行動や考え方には、極端過ぎるものが少なくない。例えば、デブレイクが「俺がその気になれば、お前など、ナパージュで生きていけなくしてやることもできるんだぞ」と恫喝ともとれることを言うシーンがあるが、それでもナパージュの国民は、妄信的についていく。樂園に見えたナパージュの民は、目をつぶり考えることを捨て去り、受け身で生きているだけなのかもしれないという疑念がわく。目をつぶることで、無風な社会が出来上がるが、その社会は「平和」であり「樂園」なのか。今起きていること、国の重鎮が行っていることに「疑問」を持って欲しいという著者の意図が伝わって来る。

物語の要所で繰り返し、ソクラテスは「そうなのかなあ」や「ずっとひっかかっている」とつぶやく。現実の世界に目を転じた時に、私たちはソクラテスとして生きているのだろうか、ナパージュの従順な民でしかないのか。この物語は、批判的精神を芽吹かせ、今後、その芽を双葉に育てたい、という願いが込められたものだと感じた。読み手が自ら考える姿勢を持っていれば、著者の多少の誘導のものともせず、それぞれの視点で物語を楽しむに違いない。

#### 選考委員による講評

#### 選考委員代表 理学部教員 高谷 康太郎

批評家の小林秀雄は、昭和25年頃の随筆『秋』の中で、彼が若かりし頃の読書の思い出を語っている。奈良の茶屋でブルーストの膨大な著作を読もうとしたがいつも昼寝をしてしまった、結局読み終わらなかった、旨のことを書き連ね、しかし「高級な文学が甚だ低級に読まれるという世の通例を私は実行したまでの事だ」「この通例の全く逆も亦屢々起り得るのだ」と続けている。

さて、本書評の講評である。私には今の世が恐ろしくてならない。世界のどこを見渡しても、手前勝手な正義を振りかざし、反対者の意見(というか反対者自身)を封殺する勢いであるのに、自分が批判されると言論の自由を言い立てる、そんな手合いばかりに見える。だが、そのような者の「正義」は一見魅惑的に見えるので、それに抗するのは難しい。この「正義」に毒されないために必要なのは、言い古された表現ではあるが、教養なのだと思ふ。今の世の中、教養を身につけるといふ事はどうも軽視される傾向にある。しかし、本書評を読んで、本学に教養をしっかりと身につけんとしている学生がいる事をたいへん嬉しく思うとともに、冒頭の『秋』の2つ目の引用を思い出した次第である。

#### 入賞者から一言



この度は、大賞に選出していただき、誠にありがとうございます。月並みな一学生と当書の丁々発止としたやりとりの書評を読んでもくれた方々に、読書に対する良いインセンティブとなり、読書への価値・可能性を改めて再確認して頂けたのなら幸いです。このような賞を受賞することが出来たのは、私の奥底に沈んでいた好奇心を呼び起こしてくれた人達のおかげです。この場をお借りしてお礼申し上げます。



# 優秀賞

いわした れん  
岩下 恋



書名：『虚無感について  
：心理学と哲学への挑戦』

著者：ヴィクトール・E. フランクル著  
； 広岡義之訳

出版社・出版年：青土社，2015

## 「心の慟哭」

「動物とは異なり、人間においては、もはや何を為すべきかについて本能が教えてくれることはない。そして、昔とはちがい、何を為すべきかについて、伝統や価値が教えてくれることもない。現代では、何を為さねばならないのか、あるいは何を為すべきなのかを全く知らず、自分が基本的に何をしたいのかについてさえわかっていないこともある。」

本文中で投げかけられたこの文章は、私たちが心の中で人知れず、絶叫している言葉ではないか。

著者である V・E・フランクルはオーストリアのユダヤ人精神・神経科医で、ナチス・ドイツの強制収容所で囚人となり、生死をさまよった過去があり、本書はその経験が彼の哲学思想を形作るうえでの重要な契機となっていることを序論として述べている。本書の本論は学術書に近いものとなっているため少し難解な部分があるのだが、そんな文章と格闘するうちに私たちに自己という曖昧なつかみづらいものの輪郭を与えてくれるような、そんな不思議な力がある。何故そのような力があるのかと考えた時、そこには彼の信念、というよりも人間という存在に対するあらゆる誤解への怒りがあるのではないか、そんなことを考えた。

それでは、私なりの解釈ではあるがフランクルは一体何に怒りを抱いたのか。それは人間を一つの側面からみて、「人間は～にすぎない」とする原理原則の事である。彼は自らの理論的恩師としてフロイトやアドラーを挙げながらも、フロイトの、人間のあらゆる行動は不快を取り除き、快楽の充足に向けられるとする快楽原則、そしてアドラーの、人間のあらゆる行動は支配欲の充足に向けられるとする権力原則に対して明確に反対する。強制収容所で悲惨な体験をするさなかで、やせ細って生きているのも不思議な人がさらにひもじい人に対して一切れのパンを分け与える姿や、管理という名目で囚人を虐げていた看守の中にも、自らの身銭を切って密かに囚人に菓を分け与える人物がいたことが彼の記憶に色濃く残っていた。加えて、彼はこの人間に対する一種の極限状態で、最もよく生き残ったのは体の頑丈な人間ではなく、なぜ生きているかを知っている人、私たちが言うところの使命感を持っている人々であったという事実から、人間のあらゆる行動は、快楽でも権力でもなく、意味の充足に向けられていることを見出した。この意味の充足が行われず、

欲求不満となった時に、代理的な反応として快樂への欲求、あるいは権力への欲求が生まれると彼は理論づける。この場での意味とは、人生の意味、つまりはこの世界において、自分を待っている何かがある、あるいは自分を待っている誰かがいるという感覚である。

振り返って、現代においてこの意味の充足が最も必要であると思われるのは私たち若者である。例えば、私たちのうち、一体どれだけの人々が、忙しいことではなく退屈なことに怯え、そのためにカレンダーを予定で満たそうとしているのだろうか？あるいは、どれだけの人々が夢や目標がないことに対して悩んでいるのだろうか？ 私たちが必死に退屈から逃れ、喧噪に身を投げ続けたとしても、ふとした退屈な瞬間に、自分のやりたいこと、あるいは為すべきことは何なのかと、激しい自省が襲い掛かるのではないか。これらの意味への欲求が満たされないことに対する自省から逃れるために、時に快樂のみを求めて売春行為を行うことや、あるいはもはや自省から逃れることは出来ない知り、自殺に走る人々もいる。はっきりと断言するが、生きている限りこれらの苦悩から逃れることは出来ない。そして、フランクが述べているように、苦悩に意味を見出すことが最もよく人間に対して意味の充足をさせ、生きるための力を与えることを私も述べておきたい。

フランクの記述において、心理学という目に見えない範囲を扱う上で、事例偏重になり科学的な理論付けに欠けているとする批評が存在する。それは私自身読む中で感じたことであり、否定のしようもない。しかし、その一方で、現代社会でフランクの述べた意味の充足が急務となってしまっていることを感じざるをえないことがある。今日もニュース番組では若者の自殺者数が十数年間減少していないと流れ、あるいは、一ヵ月ほど前に、私は人生で初めて自殺が原因だと思われる電車の人身事故というものに先頭車両で居合わせた。「絶滅収容所」と呼ばれたあの強制収容所で、フランクは何故生き残ることが出来たのか、そう考え、私はそれこそが彼が自分の理論を待っている人々がいると想像して意味への欲求不満を満たしたことはないのかと思う。つまりは、彼の理論がまさに彼自身を絶望から救い出し、生きる力を与えたのだと。邦訳ではあるが、彼の他の著書に、まさにこの事を端的に表したタイトルの本がある。その本は、『それでも人生にイエスと言う』と名付けられている。

#### 選考委員による講評

#### 選考委員代表 理学部教員 高谷 康太郎

私がこの書評を読んで感心したのは、著者のフランクが言いたかっただろう内容を過不足なくまとめている点である。フランクが見いだした「人間の行動は意味の充足に向けられている」との結論を、フロイトやアドラーとの比較の中で説明している部分は、非常に魅力的だ。書評としての全体の構成も優れており、これを読んだ者は本書に強い興味を持つであろう。秀作に選ばれるのも宜なるかなである。この書評の作者は、「意味の充足」が現代の若者に最も必要だと感じているようだが、なに、焦る必要はない。焦って変な「充足」に走ってしまうよりは、皆が調和出来る生きる意味をじっくりと探していけば良いのではないかと思う。

そうそう、冒頭の「感心した」との表現のように、この講評そのものが全体的に説教くさい。年を取ると「上から目線」な態度が随所に現れてしまっていけない。告白すれば、私もこの書評から教えられ、本書に興味を持った一人なのである。

#### 入賞者から一言



入賞するとは思いませんでした。書評というには少々自由に書き過ぎたかと反省。さて、小さな感想欄で何度も推敲するよりも誰向けの本なのかを書きましょう。簡潔に言えば、モヤモヤしている人のための本です。もしドンピシャな方がいれば、著者であるフランクと全力で対話して、喧嘩してみてください。



優秀賞

 な か や ゆ う た  
 中矢 悠太


書名：『旅のラゴス』

著者：筒井康隆

出版社・出版年：新潮社，1994

### 「SFと技術革新の先に」

筒井康隆の『旅のラゴス』では物語に SF の形式をとることで、科学技術の進歩により抱える問題を提起している。SF が物語に与える機能の一つに、時間と空間を歪め、それらを行き来することがあり、それは登場人物の特殊能力あるいは機械によって可能になる。

『旅のラゴス』において空間の移動は、目的地を強く想像することによって瞬間的に移動を可能にする「転移」であり、少なくとも旅は空間の移動とも言える。時間の歪み、空間の移動というと SF 作品においては一瞬のうちにもたらされることを指すことが多いが、本作においてはそれらの作品とは一味違っている。「2200 年前突如として高度文明が退廃し、原始に逆戻りしてしまった」という大きな物語設定の中で過去と現在をつなぐ役割を果たすのが、遺跡と人々の記憶、そして書籍である。これらは過去の情報を現代に伝え残す記録として、瞬間的ではないにしろ時間の移動を可能にしている。なぜ高度文明にあったはずの世界で、あえて極めてアナログな存在ばかりが用いられているのか。

現代において私たちは知識や情報を得るとき、どのような手段を用いるだろうか。膨大なデータベースはパソコンからスマートフォンへ、さらには腕時計型の端末へと凝縮されると、指先一つで簡単に検索出来るようになり、また世界の誰とでもコミュニケーションをとり繋がることできる。あらゆる家電や精密な電子機器に囲まれ、利便極まりない生活を営む中、まるで身体の一部であるかのように、それらはますます手放すことの出来ない存在となりつつある。

それでは、それら文明の利器とも言える代物が無くなれば、私たちは何も出来なくなってしまうのだろうか。『旅のラゴス』では南を目指して旅を続けると、先祖が最初にこの世界にやってきたキチという村に到着する。そこには巨大な宇宙船の残骸があり、前任から口伝によって知識を受け継いだ案内人ゴゴロ爺さんによって次のような説明を受ける。

「だがいかんせんそれらの職は高度に過ぎ、すべて機械の手助けがなければなし得ぬことばかり。新たに機械の原料を作るのは低度の職。即ち機械が古びて壊れたならば、ご先祖もはやなす術なく、高度な文明はわずか数年にして原始にと逆戻りした。」(107p)

つまり、人間はより優れた知能を得たけれども、頭脳ばかりが先走り身体がそれに伴うことができず、機械に頼りすぎたために手の打ちようが無くなってしまったのだと。



際限のない技術革新の中にあっても、より根源的な人間の営み、対面での会話や紙媒体の書籍から得られる知識といったアナログな手段はいかなる状況下においても残り続けていくことが強調され、現代の人々がいかに文明の利器に依存した生活を営んでいるかということに対する風刺が示されている。

さらに象徴的に表される場面がある。ラゴスは祖先の残した莫大な書籍を15年もかけて通読し、それらの内容を200枚の羊皮紙にまとめて次の旅へ向かうも、略奪され投げ捨てられてしまう。その後、苦心して再び北方にある故郷へと帰還し、覚えている限りの文明の知識の数々を伝える。しかし、ただそのままを伝えるだけでなく、体系的に学んで来た知識からこの世界に適應できるよう選別し、飛躍した発明や知識を急激に伝えることのないよう葛藤しながらも、思考し吟味してゆく。

知識は蓄えれば蓄えるほど便利であり、人生に豊かさをもたらすが、同時に使い方によっては、不自由さを招き、危険なものにもなることと共に、身になった知識は手元に記録を残さなくとも自分の中に確実に残り続け、加えて、思考力によって正誤を取捨選択できるようになることを示している。

人間は機械を発明する度に利便さと引き換えに常に問題を抱え、淘汰されてきた。昨今においてはコンピューター、インターネットの出現、さらにはAIの出現により人知を凌駕した利便さはより高度なものになりつつある。筒井康隆は30年以上も前の作品の中で際限なく繰り返される技術革新に対して警鐘を鳴らし、現代にもそのまま当てはまる問題提起をSFファンタジーとして描いたのだ。著者の慧眼には驚かされるばかりだが、同時に物語に示されている警句をないがしろにしたまま高度文明へと突き進んでしまうのではないかと恐ろしさも感じる。利便ばかりに先走ることなく、事の本質は何なのかを問い、捉えられるよう尽力したい。たまにはスマートフォンを手放して、紙でできた本を手にとって世界に浸ってみたいと思う。

#### 選考委員による講評

#### 選考委員代表 外国語学部教員 北澤 義之

評者は、この作品が「物語にSFの形式をとることで、科学技術の進歩により（人類が）抱える問題を提起している」ととらえ、文明の発達知識や技術のみに依存して、「頭脳ばかりが先走り」それを使いこなす知恵がなければ限界に直面することに注目した。評者は、筒井がすでに30年前に技術革新への過度の依存が持つ危険性を認識した「慧眼」を評価している。生まれながらにしてパソコン、スマホが当たり前のような若い世代が、人類にとっての科学や技術の問題を批判的にとらえる目を持っていることに「安ど感」を覚えた。その一方で、学生時代に多くの筒井の作品に親しみ、何十年ぶりにそれを読んだ当方としては、主人公の旅に費やされた人生と文明の盛衰のオーバーラップが印象深かった。これも、年齢のなせる業だろうか。周知のように、作品は読者の立場によって異なる見え方をする。評者もまた年を経て、懐かしいこの作品がどのように見えるか愉しんでほしい。

#### 入賞者から一言



この度は優秀賞に選出していただき、誠にありがとうございます。まさか自分の書評が選ばれるとは思ってもみませんでした。今回の受賞を励みに、これからより一層読書に親しみ、書く力を磨いていきたいと思っております。



優秀賞

 な わ た                      み ら  
 縄田                      美蘭


書名：『日本文化私観』

著者：坂口安吾

出版社・出版年：中央公論新社，2011

### 「『墮落論』の源流」

坂口安吾は、太平洋戦争後の日本で、世相に流されない合理的な思想で先鋭的な作品を多く執筆し、太宰治、織田作之助らと共に無頼派と呼ばれた。『日本文化私観』は複数のエッセイからなる短編集である。その中でも今回は、戦後すぐに発表され、安吾の思いが最も込められているであろう『墮落論』に焦点を当てることにした。

『墮落論』では、政変などにより外殻だけとなってしまった古い慣習や地位に固執し、それを無理に遂行するために人間本来の生きる目的を見失ってはならないという主張が述べられている。印象的なフレーズ「生きよ墮ちよ」(p.120)の「墮ちよ」は、体面にとられず自分の自然(じねん)に正直であれ、という意味の文章を一言で表したものである。

しかし、一般的に「墮ちよ」と聞くと、退廃や猥雑を奨励しているかのような印象を受ける。全員が思うがままに墮落したら、原始的な社会にしかならない。安吾の本願は、自身の生真面目さにがんじがらめとなり追い詰められてしまっている人への救済であり、犯罪の助長でも、文化や伝統の破壊でもない。そのことを読者は読む前に理解しておくべきであるし、安吾も文中で明言すべきであった。

ところで、『墮落論』を読んでいる時にあることを思い出した。『半七捕物帳』などで有名な明治時代の劇作家・岡本綺堂の作品にこんな話がある。『俳諧師』という零落した武家の父娘の話だ。武士をやめ故郷を離れて暮らす父とその娘がいた。父は手探りで暮らしを支えるも生活は次第に行き詰まり、このままでは二人ともが飢え死にしてしまう。父は自分の命を犠牲になんとか娘だけでも生き延びさせようとする。それを知った娘は自分こそが犠牲になろうとする。そして父と娘はいつものように、武士はかくあるべしといった押し問答になる。そこへ父の友人が訪れ、親子の事情を聞くと、父の俳諧の才覚を悪事に使って犯罪者となって二人とも生き延びるとそそのかす。父は怒って友人を追い返すも書き置きを破り、また呼び戻す。話はここで終わる。

恐らくこの父親は今後、罪悪感に駆られながらも罪を重ねるのだろう。ことの顛末だけを見れば、武士が犯罪者に転落していくことを予見させた話である。犯罪が立派だとは思わないし、他にも選択肢はあったはずだが、今優先して検討すべき問題はそこではない。最も重要なのは、父が今までの狭小な価値観を捨て、見栄のために死ぬより、犯罪者と言われながらも娘の生活を安定させる方を選んだとみられるところである。言い換えれば、名を捨てて実を取るという決断に自ら思い至ったということだ。安吾が『墮落論』で表し

ているのはこのことではないか。たとえ墮ちたとしてもそれでも生きる、生きなければならぬ、とまるで『俳諧師』の最後で安吾が私たちに強く訴えかけているように感じた。

私は、安吾が『墮落論』を書いた時、その根底には『俳諧師』があったのではないかと考えた。それには二つの根拠がある。一つは、岡本綺堂は日本最古の推理作家であること。推理小説は審美的な文学作品とは違い、ロジックの組み合わせである。よってその当時にしてはめずらしく、合理的な思想を持って他の作品も執筆していた。もう一つは、安吾の『日本文化私観』に同じく収録されている『あきらめアネゴ』という作品に「岡本綺堂『相馬の金さん』僕はこの有名な舞台を見たことがなく、読んだのだけれども」(p.106)という記述がある。もし他の綺堂の戯曲も読んでいたのなら、『俳諧師』を読んだ可能性は十分にあり得る。さらに、綺堂は維新後の、安吾は戦後の、それぞれ人々の生活が大きく移り変わった時代を経験している。

そうであったとすれば、安吾は創作物である綺堂の文学作品の構成を正しく読み取り、評論として世の人々にわかりやすく伝えたことになる。明治生まれの作家の文学作品だとその真意まで読み解くのは難しいが、安吾が置かれた戦後の状況と織り交ぜることでより多くの人に簡単に理解してもらうことができた。このことは、どちらも優れた作品であるのに、現在『俳諧師』より『墮落論』の方が有名であることから明らかである。『俳諧師』は『墮落論』の源流であり、『墮落論』は『俳諧師』の解説書である。これが、私が本を読んで分析した結果発見したことだ。

古い文学作品や批評・随筆は難解に見えて敬遠されがちだが、その内容は意外なほど純粹で能動的であったりする。様々な本を読んでいると、その中に不意に共通点を見つけることがある。当人たちですらも気づかなかったような思想の一致に、時代を飛び越えて触れられるのは今この時を生きるあなたしかいない。その発見や分析はあなた独自のものだ。読後に情緒が豊かになるだけでなく論理的にも心揺さぶられる出会いがあるのが、読書の醍醐味でもある。本を開けばそれまで眠っていた文字が私たちに語りかけ、新しい世界を開いてくれる。

### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 中西 佳世子

坂口安吾の『墮落論』は『続墮落論』とあわせて、第二次世界大戦後の価値観の激変に戸惑う日本人にその変化をどのように受け止めて前に踏み出すべきかと呼び掛けた。精神的根無し草になってただ翻弄されるのではなく、いかに墮落すべきであるかを混乱の中で考え抜き選び取る自由があることを示し、敗戦を生き抜く勇気を人々に与えたのである。

本書評はその時代性から作品を読み解くというよりは、『墮落論』と『俳諧師』との間テクスト性に注目することで作家の思想と創作動機に迫る試みを行っている。そして『墮落論』を『俳諧師』の解説書と結論する。そうした論構成へのこだわりからか『俳諧師』の説明と影響についての推論に力点を置きすぎている感が否めず、『墮落論』への切り込みが物足りなく感じる。しかし、坂口安吾の他作品や岡本綺堂への興味をも呼び覚まし、その高い文章力も相まって読者の知的関心を刺激する意欲的な書評となっており評価したい。

### 入賞者から一言



ありがとうございます。

新しいタイプの書評を書こうとしたときに、私の荒削りな草稿を無下に否定せず推敲し研磨してくれた全学共通教育センターの小山准教授に感謝します。

これが理系の第一歩となることを願っています。



# 佳作

い し た たける  
石田 健



書名：『夜は短し歩けよ乙女』

著者：森見登美彦

出版社・出版年：角川書店，2006

## 「異化された京都ですれ違うラブストーリー」

いくつもの本が並ぶ書店で美しい女性が描かれている本を一冊手に取った。京都を舞台にした森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』という学園物語だ。主人公の黒髪の女性とその女性に思いを寄せる先輩を中心に、個性あふれる登場人物たちが読者のよく知る夜の先斗町や、下鴨神社の古本市、京都大学の学園祭で珍事件を巻き起こす。

クラブの後輩の黒髪の女性にひそかに思いを寄せる先輩は、彼女と「お近づき」になるために夜の先斗町にくりだす。しかし、肝心の彼女は先輩が仕掛けた「頻繁する偶然」の出会いにも「奇遇ですねえ！」と言うばかり。彼女と距離を縮めるため頑張る先輩は行く先々で個性あふれる登場人物たちに邪魔をされ、一向に恋が進展しない。例えば、並木の茂る高瀬川沿いの先斗町では、彼女は木屋町の「月面歩行」というバーで東堂という男に出会う。借金まみれの彼を救うため、彼女は「叡山電車を積み重ねたような三階建の風変わりな乗り物」に乗り金貸しの李白と対決する。また、下鴨神社の参道で開かれた古本市は、「あたりを憚るような囁き声がして、あたかも妖怪の集会」のようである。彼女はそこで幼少期に読んだ古本を探すが見つけれられない。先輩が彼女の本を見つけ、手に入れるがあと一歩のところまで「古本市の神様」に邪魔をされ直接渡せなかった。学園祭では、「韋駄天コタツ」と「偏屈王」が物語のキーだ。「韋駄天コタツ」とは校内のいろいろなところで神出鬼没に現れるこたつで、「偏屈王」とは校内で突如おこなわれる「ゲリラ演劇」。その「ゲリラ演劇」を止めようとする事務局と「偏屈王」のスタッフの攻防に先輩と彼女は巻き込まれる。

ここまでが大まかなあらすじである。では、もう少しその魅力を読み解いていこう。主人公の彼女は黒髪の「乙女」と言いながらお酒が好きで誰とでも仲良くなる。さらに「胸を触られても一つや二つくらい」と思うような考え方の持ち主だ。京都を舞台にしているこの作品は細部まできちんと描き出す。「四条木屋町、阪急河原町駅の地上出口のわきでは、ギターを弾く若者とそれに聞き惚れる人々がおり、道行く女性に食い下がってゆく黒スーツの男衆が立ち廻り、顔を紅くした老若男女が次なる止まり木を求めて賑やかに数かぎりなく往来する。」この部分はまさに四条木屋町を表している。しかしこの物語は現実の京都を異化したファンタジー小説である。四条木屋町は「魅惑の大人世界」と表され、前述の



ように現実にはない乗り物を登場させている。三階建の電車と聞くだけで読者はわくわくし、異世界に連れていかれるような気持ちになるだろう。京都をよく知る人は、その場所を思い浮かべれば一気にそこが夢の世界になるに違いない。また、古本市では、先輩は彼女の本を手に入れる特権を得るため、「下鴨神社を中心とした半径二キロメートルに存在する『辛さ』という概念を、一切合切この鉄鍋に拾い集めて煮込んだのではないかと思われるほど」辛い火鍋を地獄のような思いで必死に食べる。この火鍋を想像するだけで口の中が辛くなってきそう。先輩の恋する熱い気持ちがひしひしと伝わってくる。

この物語の面白さは語りの部分にもある。黒髪の彼女と先輩の二人がそれぞれ一人称で語るにより、二人の語りにギャップが生まれる。例えば古本市で先輩が本を彼女に譲る場面で、先輩は「唐突に逃げ出した自分は、彼女の目にどう映っているであろう。よほど理解不能のヘンテコ野郎と思われたに違いない。『恥を知れ！ しかるのち死ぬ！』」と語るのに対し彼女は先輩もこの本が欲しかったにもかかわらず、「それを断腸の思いで諦めて私に譲り、愛しい本を諦める苦痛を紛らわすために早々に立ち去ったのでは？」と考える。彼女は、先輩に対して紳士的な印象を持ち、何か恩返しをしなければという気持ちになる。先輩はマイナスに捉えているが、彼女は先輩に対してとてもいい印象を持つようになる。このように登場人物である黒髪の彼女と先輩はいわゆる一人称の「物語世界内の語り手」として物語を告げるのだが、その解釈が異なっているというところに展開の意外性を味わうことができる。

この異化された京都ではまだまだ読者の知っている京都の場所が数多く登場している。彼女と先輩の語りはしばらく平行線が進むが、交差していき一つとなる。ぜひこの二つを楽しみにして手に取って読んでみてほしい。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 北澤 義之

この書評は、京都、学生生活、異界という舞台装置の中で展開される森見の作品の魅力をバランスよく、しかも読者の興味を掻き立てるように紹介することに成功している。その要因の一つは、必ずしも単純でない物語の見どころをリズム感のある文体で巧みに紹介してみた評者の文章力にあると考える。また、作品の主人公である「黒髪の女性とその女性に思いを寄せる先輩」が過ごす京都の中でも現実と異界の交錯する、四条木屋町や下鴨神社や京都大学周辺などの魅力的な境界をとりあげながら、評者は時として先輩の思いに寄り添ってその心模様を描きだしている。また評者が物語の一人称での語りをもたらす先輩と彼女の思いのギャップの意外性に注目して論じているところに、作品の丁寧な読み込みを感じることができた。また、作品の魅力とともに、京都の魅力を共有したいという作者と一体化したようにも見える評者の思いが伝わってくる印象深い書評であった。

#### 入賞者から一言



今回佳作をいただいたことにとっても驚いています。小学校の頃から読書感想文や作文は私の苦手なことで、いつも適当に書いていました。今回、ゼミの活動で図書館の書評大賞に応募させていただきました。中西先生の指導のおかげで、文書の書き方が自分でも上達していると実感しています。これからの活動においても、今以上に上達できるよう精進していきたいです。



# 佳作

う め ざ き さ な  
梅崎 咲奈



書名：『カンディード』

著者：ヴォルテール著；齊藤悦則訳

出版社・出版年：光文社，2015

## 「最善ではなかった最善説」

思想を扱う小説は難解だと思われることが多い。他人の思想を理解するには、基礎となる知識が必要だからだ。まして宗教思想だとなおさらである。本書はキリスト教における「最善説」を扱っているが、専門的に研究や勉強をしている人以外にこの名前を聞くことは少ないだろう。「最善説」とは、「神は善の性質を持ち、その神が創造した世界の物事は全て最善である」という考え方だ。この考え方は、広く捉えればアリストテレス等の時代から存在するが、本書においてはライブニッツの「神義論」の中で語られる「最善説」を取り上げている。キリスト教には様々な神の観念が存在し、人々は昔からその定義について論争を繰り返してきた。本書の作者ヴォルテールもその中の一人であり、作中で「最善説」を批判している。

本書の主な登場人物は、主人公カンディードと、その師パングロス、そして恋仲のクネゴンデ姫の3人である。カンディードはパングロスの教える「最善説」を信じ、何不自由なく生きていたが、クネゴンデ姫との密会をきっかけに、住んでいたお城を追い出され、世界中を旅するようになる。そして未知の世界でカンディードは、己の信仰を揺るがす様々な災難に遭うのである。

ここで注目したいのは、登場人物たちの描かれ方である。登場人物たちのほとんどが、愚かで浅はかな人間として描かれている。これは、登場人物たちを愚かに描くことで、ヴォルテールが「最善説」を批判しているのだが、特にパングロスの愚かさは物語の中で飛び抜けている。パングロスは常に自分の考えが正しいと判断し、何があってもまずは「最善説」を人々に説くのである。たとえ、難破しかけの船の上だろうと。そして師が愚かなら弟子も愚かで、カンディードはパングロスの教えを信じ、その純粋さと無知によって自らと他人を欲望のままに不幸へと貶めてしまうのだ。このカンディードの純粋さは無知と表裏一体であり、物語はこれによって悪い方向へと進んで行くのである。そしてこのカンディードの性質によって引き起こされた物事の全部が、ヴォルテールによって強引に繋げられ、さらにその滑稽さを浮き立たせている。つまりヴォルテールは物語の中で、常に「最善説」を風刺し続けているのである。しかしカンディードにはパングロスに備わっていないものを持っていた。それは疑問を持つことである。たくさんの災難に遭うことで、日に

日に「最善説」に疑問を持ち始めるのだ。このことが更にパングロスの滑稽さを浮き彫りにさせるのである。

そして本書の大きな特徴は、物語展開のテンポの良さである。全30章で構成されている本書は、1章が5、6ページと極めて少ない。本書を読み終えたとき、妙な疾走感があったのだが、これは次々と変わるカンディードの周辺状況の目まぐるしさからであり、場面の切り替えが早い分、次の展開が気になってしまいどんどん読み進めてしまうからだ。冒頭で、城を追いつけられたカンディードはブルガリア人に奴隷として扱われるが、次には大嵐の中、船に乗っていたり、気づくとクネゴンデ姫と再会を果たしていたりと、とにかく展開が早い。

しかし思想小説というだけあって、展開の早さと同時に作中には様々な宗教思想が登場する。主人公たちと論争を繰り返して、時には生死に関わる出来事に遭うのだが、正直言ってその思想全てを理解して読み進めることは、とても難しい。宗教に疎い日本人だとなおさらだろう。だが、全てを理解する必要は無い。ただ、カンディードが「最善説」に疑問を持ち始め、その思想を変化させていくことが重要で、思想云々は本書において必ずしも中心的テーマではない。結局のところパングロスを始めから「最善説」を信じておらず、物語は「とにかく、ぼくたち、自分の畑を耕さなきゃ」というカンディードの現実的な台詞で終わるように、その思想自体は物語の展開を促す役割を担っていると言えるからだ。

思想小説は難解として敬遠されることが多いが、本書のように物語のテンポが良く、また登場人物たちの滑稽さによるエンターテインメント性の高い作品も存在する。『カラマーゾフの兄弟（上）』を50ページほど読んで諦めた私にとって、本書は思想小説のイメージを変えてくれた作品である。本書には脚注が各ページに備わっており、難しい思想や哲学には簡単に説明がされているため、読み進めやすい作品でもある。思想を扱っているといって敬遠せず、是非一度手にとって読んでいただきたい。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 沈 政郁

書評は大きく4つの内容を含むべきと自分は考える。その4つの要素とは、本の内容を正しく理解しているのか、読書を通して自分とどのような会話をしたのか、本に対する新しい視点を提供しているのか、未来の読者に本を読むべきか否かに対して答えを提供しているのかである。

初めに本の内容を正しく理解しているかについては概ねうまく捉えていると思うが、読書を通じた自分との会話の部分は弱いと感じる。この本を読みながら自分の心の中に生じた何かを話していたらもっと良かったと思う。

本に対する新しい視点の部分も少し弱い。書評者の独自の視点で本を解釈する部分がまだ十分でないと感じる。最後の、本を読むべきかについては十分にアピールできていると思う。次に書評を書く機会があれば、上述の部分を考慮してまた挑戦してほしい。

#### 入賞者から一言



今回このような賞を頂き、本当にありがとうございます。まさか自分が佳作に入るとは思っていなかったので、驚きと共に大変嬉しく思います。書評という形で作品を論ずることはとても難しかったのですが、少しでも思想小説の面白さが伝われば幸いです。



# 佳作

はやし ゆうすけ  
林 祐輔



書名：『限りなく透明に近いブルー』

著者：村上龍

出版社・出版年：講談社，1976

## 「無色という色」

村上龍の処女作であるこの物語は、その題の美しさからは想像もできないほど汚い世界を写し出している。19歳の主人公、リュウがその周囲を取り巻く暴力やセックス、ドラッグをおもむろに、淡々と語っていく。彼の感情は、はっきりと描かれぬ。とにかく生々しく、しかし冷静にその自堕落な生活を綴る。私たちはただずっと、そのグロテスクで非日常的な様子を見せられることになる。女の子は黒人に暴力的に犯され、その隣で男がよだれを垂らしながらヘロインを吸引し、台所には腐ったパイナップルが置かれゴキブリが壊死している。米軍基地が蔓延る街の一角にある、黒人が出入りする「ハウス」をたまり場としている彼らは、リリーやモコ、オキナワなど偽名で通っていて、男女関わらずパンツ一枚で生活し、気ままにキスを、殴り合いを始める。感情的な会話を繰り返す。

どうしてこの話を書かなければならなかったのだろう。もちろん既に論じられているようにこの物語が、沖縄の基地問題や敗戦後の日本人の、拭い去ることの出来ないアメリカ人への劣等感、無気力な若者とドラッグを扱っていることは明白である。

それにしても、なぜこれほどまでに読者を傷つけなければならなかったのだろうか。数ページ繰れば分かる。途端にあの場所が眼前に広がり、臭いが感じられ、指先がぴりぴりとした感覚になり、目はもうやめたいと叫び始める。もう読み進めたくない、と。そこにストーリー性は無く、ただ同じような毎日を、絶望を抱きながら過ごしている彼らの姿を、それでも読み進めないわけにはいかない。

前後は省略するが作中、「オキナワ」と呼ばれる男友達が突然、リュウにフルートを吹くよう勧める。

「本当はもうガタガタ震えて気が狂う程ヘロインを打ちたいんだけど、俺とヘロインだけじゃあ何か足りないような気がしたな。打ってしまえばもう何も考えないけどな。それでその足りないものっていうのはさあ、よくわかんないけど、レイ子とかおふくろじゃないんだな、あの時のフルートだって思ったんだ。それでいつかお前に話そうと思ってたんだ。リュウはどういう気持ちで吹いたのか知らないけど俺はすごくいい気分になっただろう？あの時のリュウみたいなのがいっぱい欲しいと思うんだよ」



ここでもリュウは聞く耳を持たず、この後再三にわたってオキナワはフルートを吹くよう勧めるのだが、「言ったろ、気分がのらないんだ」と相手にしない。ついに、彼のフルートを我々は聴くことが出来ない。

しかしこのオキナワの長い台詞を皮切りに、物事はさらに悪い方向へと進んでゆく。ヨシヤマは左手首を切り刻み、ケイは殴られ続け死のはざまを彷徨い、レイコはジャクソンの女になる、と宣言し出て行ってしまふ。登場人物たちはみな、突然消えてしまふ。

冷蔵庫に入っている腐ったローストチキンをかじってしまい、動けなくなったリュウのそばに現れたのは本書の表紙にもなっているリリーだった。彼女はリュウにコーヒーを入れてやり、変な連中と付き合うのはやめろ、と言いながら最近読んだ小説に出てきた主人公の男に、リュウとの共通点を見出し嬉々として話し始める。彼は話を聞けない、感情があふれ、痛みに怯えて聞く余裕がない。とうとうガラス片で、自分の胸を突き刺してしまふ。

リュウは病院で目を覚まし、ポケットに入っていたガラス片を取り出してこのガラスみたいになりたい、と思う。「僕自身に映った優しい起伏を他の人々にも見せたい」と。そのガラスの色は限りなく透明に近いブルーだった。

この作品のどんな読者よりも、苦しかったのは著者である。いかなる実質的な痛みにも勝る苦しみだっただろう。だけれどそれに（読者も含めて）耐えることが出来たのは、ほとんどすべてを占める辛く残酷な現実のなかで、フルートやガラス片、そしてリリーといったこれ以上に無いほど美しいものがあつたからだ。どのような感想も持たず、行動も起こさない透明なリュウには、現実はあまりに醜かった。他人に愛され、自分を傷つけることでリュウはようやく願望を抱き、色を持つことが出来たのだった。あとがきにあるように、これはリュウがこの物語の4年後に書いたものである。優しい起伏は彼に、どのように映つたのか。ぜひ体感してみしてほしい。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 沈 政郁

書評は大きく4つの内容を含むべきと自分は考える。その4つの要素とは、本の内容を正しく理解しているのか、読書を通して自分とどのような会話をしたのか、本に対する新しい視点を提供しているのか、未来の読者に本を読むべきか否かに対して答えを提供しているのかである。

初めに本の内容を正しく理解しているかについてはうまく捉えている。しかし、読書を通じた自分との会話の部分はまだ弱い。読み進めること自体が自分を傷つけると表現しているけれど、もう少し具体的にどのような感情だったのか表現してほしい。

本に対する新しい視点の部分も弱い。本の内容の紹介と既存の捉え方に対する言及はあるけれど書評者の独自の視点で本を解釈する部分がまだ十分でないと感じる。最後の、本を読むべきかについては十二分にアピールできていると思う。自分はこの書評を読んで、もし自分がこの本を読むときにはコーヒーではなくウイスキーを準備しようと決めた。

#### 入賞者から一言



一度吐き出してしまったものというのはどのようなかたちであれ、もう剥いでしまった皮であり、ひどく醜く、幼稚で、狭量に見えてしまうものです。おそらくこれから数十年、その繰り返しを避けることは出来ないのでしょう。

精進します。



# 佳作

ひとみ まな  
人見 茉那



書名：『マスカレード・ホテル』

著者：東野圭吾

出版社・出版年：集英社，2014

## 「仮面を守る」

人々がホテルに求めることとは一体何であろうか。利用するにあたって便利な立地であること、手ごろな値段であること、また、Wi-Fi 環境が整っていることなど人によって様々だろう。中でも、一つ共通して言えるのは、一晩の安らぎであると推測できる。『マスカレード・ホテル』はそんな多くの人が集まるホテルが舞台のミステリー小説である。

東野圭吾さんのファンである私が本書を手取るのに特別な理由は必要なかった。しかし読後の感想として抱いたのは、間違いなく本書が私のなかでの面白かったランキング 1 位であるということだ。『探偵ガリレオ』や『新参者』で有名な東野圭吾さんの作品としては珍しく、女性が主人公の本書。山岸尚美は、一流ホテルであるコルテシア東京のフロントクラークだ。都内で起こっている連続殺人事件の次の犯行現場が彼女の勤めるコルテシア東京であるとして、もう一人の主人公、刑事の新田浩介がホテルに派遣されるところから物語は展開していく。

本書が他のミステリー小説とは異なるところは新田浩介の役割である。彼は刑事として事件に取り組むのではなく、ホテルマンに扮して捜査をするのだ。しかし、ホテルはお客様に安らぎを与える場所であり、お客様のことを殺人事件の犯人ではないかと疑う目で見るホテルマンなど存在してはいけない。そこで山岸尚美が新田浩介をサポートするように命じられるのだ。ただのミステリー小説ではなく、ホテルスタッフとしてのプロ根性と、刑事としてのプロ根性がぶつかり合いながら事件解決に挑む二人。ここに本書の面白さが詰まっている。

物語の大きな軸となる連続殺人事件。すでに 3 件も発生しており、現場には決まって奇妙な数字が残されている。その数字から導き出された次の犯行現場こそが山岸尚美の勤めるコルテシア東京なのだ。刑事たちは張り込みを始める。客に化ける者、ベルボーイに化ける者、ハウスキーパーに化ける者、そして、フロントスタッフに化ける者、新田浩介である。舞台がホテルという面白さがここから遺憾なく発揮される。ホテルを利用するお客様からすると新田浩介もまたプロのホテルマンであり、ホテルマンとしての対応を求められるのだ。サポートを命じられた山岸尚美が青くなるのは言うまでもない。なぜなら、新田浩介はやってくる客を疑うのが仕事であり、ちっともホテルマンに見えないからだ。「客がルールブック」であるホテルとしては新田浩介の態度や立ち居振舞いがマイナスにしか

ならない。山岸尚美はまず新田浩介がホテルマンに見えるように教育していく。そんな中でもトラブルが何件も起こる。いちやもんを付けて部屋のグレードアップを目論むお客様や、ある人物に追われているから匿ってほしいと頼むお客様、また、視覚障害者のふりをするお客様など、様々な「お客様」が登場する。プロのホテルスタッフである山岸尚美はもちろんのこと、彼女によって教育された新田浩介も共に鮮やかに「お客様」に対応していく姿が興味深くてたまらない。特に、最初は全くホテルマンに見えなかった態度の新田浩介が山岸尚美によって成長していく過程に注目なのだ。こうして日が進んでいく中で着々と連続殺人事件の犯人への手がかりをつかんでいく。

ミステリー小説としての面白さはあえてここでは言うまい。注目すべきは、ホテルが舞台であることの人間模様である。アメリカを「人種のサラダボウル」と表現することがあるが、ホテルもまさにそれであると感じた。作中で山岸尚美はこう語っている。「ホテルに来る人々は、お客様という仮面を被っている」「ホテルマンはおお客様の素顔を想像しつつも、その仮面を尊重しなければなりません。(中略)ある意味お客様は、仮面舞踏会を楽しむためにホテルに来ておられるのですから。」なんと腹落ちする言葉だろう。お客様からの様々な要求に応えることこそがお客様の仮面を尊重するということなのだ。ホテルスタッフとして仮面を守り切る奮闘ぶりは着目せざるをえない。

本書の面白い点や注目すべき点を挙げるのにはきりが無い。一方で、欠点は一つだけ挙げられる。それは二人の主人公のバランスである。冒頭にも述べたように女性がメインで活躍するのは東野作品としてはとても珍しいのだ。中盤までこそは、山岸尚美と新田浩介のダブル主演とも言わんとするものだったが、連続殺人事件に迫っていくにつれてだんだんと新田浩介にスポットライトが当たっていく。結局、山岸尚美はサポート役に過ぎず、女性がメインになるのは難しいといったように感じられてしまったのが残念だ。

最後だが、本書が映画化されることを私は最近知った。本離れが進む昨今では映画の方を身近に感じる人の方が多いのだろう。映画を観てから本書を手取るのでも構わない。主演の木村拓哉と長澤まさみが本書の新田浩介と山岸尚美のイメージに沿っているのか是非とも自身の目で確認してほしいものだ。

**選考委員による講評**

**選考委員代表 総合生命科学部教員 染谷 梓**

「ホテルに来る人々は、お客様という仮面を被っている」。この作品の主人公のひとりであるホテルのクラークを務める女性の言葉です。この作品のタイトルに含まれる「マスカレード」は「仮面」舞踏会、書評のタイトルにも「仮面」という言葉があります。ホテルには、それぞれに事情を抱えた人々が、「お客様という仮面」を被ってやって来ます。その「仮面」こそが、ミステリーの舞台にはうってつけで、本作品でもホテルが次の犯行現場とされます。書評という性格上、作品を読む前に結末を予想できるようなことは書けないという制約がありますが、本作品はミステリー小説であるため、その視点をもってまとめることはさらに至難の業だったかと思えます。その制約の中、この書評は登場人物の人物像や人間関係、舞台装置である「ホテル」の特徴をうまくとらえることで、作品の魅力を伝えています。

**入賞者から一言**



このような賞を頂けると思っていなかったのでとても嬉しいです。ありがとうございます。感想文ではなく書評であるという点で、文章に悩むことが多くありました。もともと読書は好きなので、これで満足せず邁進していきたいと思います。



# 佳作

もりもと ともゆき  
森本 智之



書名：『むかしのはなし』

著者：三浦しをん

出版社・出版年：幻冬舎，2008

## 「現代に蘇る昔話」

「かぐや姫」「桃太郎」「花咲か爺さん」。私達が子供の頃に読み聞かされてきた遙か昔の話にも「今」であった時が存在し、それが口伝・書物様々なものを媒体として長い時を流れ続けて「現代」にたどり着く。では、私達が生きる「現代」も私達自身が体験した事や経験した事が未来に残る何かに刻みつけられれば、それもまた誰かにとっての「昔話」になっていくのだろうか。私達が生きる「今」が誰かにとっての「昔」になっていった時に一体何が語り続けられるものになっていくのだろうか。私が今回の書評を書くに至った作品はこのような事を考えさせられるものだった。

本書『むかしのはなし』は「いま『昔話』が生まれるとしたら」のテーマのもと7つの短編によって構成されている。5人の女を手玉に取り死地に立たされているホスト、飼犬との散歩の経験を空き巣技術に昇華させた泥棒、田舎の漁師村から上京し美人の科学者と婚約した逆玉男、このような登場人物が昔話を思い起こさせる情景描写と共に短編の中で活躍する。それぞれ現代小説として描かれながらも全短編が他者に対する語りかけであったりするなど、どこか昔話を想起させる表現技法が、誰もが本書を手に取りまず初めに分かる魅力になっている。

また本書は、短編小説でありながらもその実ほぼ全ての作品が繋がりを持っており、それが本書の重要な要素として機能している。先ほども言ったように本書は短編から構成されているものの、それぞれ完全には独立しておらず、ある事柄が各物語の根底に流れているのである。その事柄とは、3ヶ月後に隕石の衝突により地球が崩壊し、抽選によって選ばれた人間のみが、宇宙船で地球から脱出できるといったものである。本書においてこの事実は、報道された直後でこそ軽く受け止められていた事なのだが、この事実が出てきた話以降に、徐々にそれぞれの短編で重要視されるようになっていく。各短編を読み進めるごとに隕石衝突という情報が、人々の中で大きくなっていく様は、刻一刻と地球崩壊の期限が迫っているという感覚を、読み手にも感じさせるものがあった。確実に迫る自分の命が消えるまでのタイムリミットの中で人々が最後に何を考え、何を大事にしようとするのか。物語を盛り上げる演出としてとても面白く、とても重要な部分を担っていると言える。



また「隕石落下による地球消滅」という SF 的な要素の存在は、昔話特有の現実離れた演出が感じられるような仕掛けとして機能していると考えられる。作者の表現技法の秀逸さに驚かされる点であると言えるだろう。

昔話の面白さや特徴を嫌みに感じさせず、その中で SF 的な内容を盛り込み読者を惹きつける本書であるが、それは本書の表面的な部分にすぎない。本書は単に昔話の特徴を現代小説に投影し、焼き回しするような薄っぺらな小説ではないのである。

作者は本書の序文にて「わたしを記憶するひとはだれもいない。わたし自身さえ、わたしのことを忘れてしまった。胸のうちに、語り伝えよという声のみが響く。これはたぶん、思い出のようなもの。あとはただ、ゆっくりと忘れ去られていくだけの。」と語っている。ここで作者は、人間の経験や体験を「語り伝える」行為の持つ意味の本質を表していると考えすることができる。

古来人間は、物事や体験や想像したことを知識として伝え記録し、様々な媒体を利用してそれを堆積してきた。人間は死んでも、堆積した知識は「語り伝える」ことによって風化しないし死に絶えない。昔話もそうして過去に存在した知識が語り伝えられる事を何度も繰り返した上で成り立つ生きた化石である。何世代もの人達が一つの「話」を聞き、それを記憶し、また次の世代に伝える。その繰り返しが一つの「話」を「昔話」に昇華させるのである。一つの「話」という土台に「語り」という土が堆積し出来た地表こそが「昔話」なのである。そうすると本書は「いま『昔話』が生まれるとしたら」というテーマのもと、昔話になる可能性を含めた作品や人間の行為を指し示した短編の集合体との見方もできるのである。

「語り伝えるということは一体どういう事なのだろうか。」「自分達が過ごしている時間の意味って何なんだろうか。」きっと本書を読み終えた後誰もがふと考えるだろう。「語り伝える」事と「昔話」の関連性をあなたも、小説にほのかに香る「かぐや姫」や「花咲か爺さん」の存在を楽しみながら考えてみて欲しい。

<p><b>選考委員による講評</b></p>	<p><b>選考委員代表 総合生命科学部教員 染谷 梓</b></p>
<p>「昔話」と聞いて思い描くものは何でしょうか？ それぞれの人が思い思いの記憶をよみがえらせることかと思いますが、「昔話」を聞いたことがないという人はまれでしょう。しかし、『昔話』が生まれる瞬間について考えたことがある人は多くないと思います。この作品は、「いま『昔話』が生まれるとしたら、と考へて書いたものだ」と作者は述べており、7つの短編からなります。それぞれの短編の登場人物が「今」語っていることは、いつか「昔話」になるのでしょうか？ 今回受賞した書評は、「昔話」と「今」の関係について、作品の魅力を伝えながら、しっかりとした考察をしていると感じました。また、「今」起きていることが「昔話」として「語り伝え」られる過程について、自分なりの視点をもって論じられていました。「昔話」がもつ「語り伝える」ということの価値を再確認させられました。</p>	

**入賞者から一言**



この度は、選出して頂きありがとうございます。  
初めて自分が読んだ本を誰かに紹介する形の文章を作成してみたのですが、自分が感じた本の魅力を人に伝える難しさや、面白さに気づけました。大変良い経験になりました。ありがとうございました。

## 第14回 京都産業大学図書館書評大賞 アンケートと統計



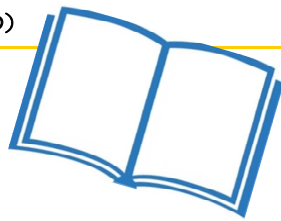
アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- 1年次生の時に授業で書評大賞の存在を知り、興味を持ったから。昨年は気付いたら応募期間が終了しており、今年応募しようと思った。
- なかなか独特な学内イベントだと思ったから。1年次から興味があったのも理由のひとつ。
- 授業で本を読む課題があり内容が面白かったので、みんなにも読んで欲しいと思い応募した。
- 読んだ本を客観的かつ、どこまで批評できるかを試してみたかったから。
- 自分の中でこの本は何なのかをまとめるために書いた。
- ゼミの課題、先生の推薦で。(47人)

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- 興味のある分野だから 21人
- 先生からの推薦・指示 3人
- 好きな作家だから 14人
- 図書館で見つけたから 8人
- 話題の本だから 12人
- その他 3人



Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(37人)(理由)

- 今回書評を書いてみてとても難しかったが、とても面白かったので機会があれば頑張りたい。
- 文字にすることで本の内容をより理解することができたから。
- 自分の文章作成能力の向上が非常に実感しやすいから。
- 今回の書評では苦勞したことの方が多かったが、違うジャンルの本でも書いてみたい。
- 読んで終わりではなく、書評というものを考えて書き、それを読んでくれた他者との話し合いが今後出来れば良いと思ったから。

「いいえ。」(24人)(理由)

- 文字数が多いと感じたため。1,600字はきつい。
- 自分の言葉を上手く表現するのが苦手で大変だったから。
- 来年は就活を控えていて時間が取れるか不明であるから。

Q4) 執筆してみた感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- 書評を書くことで自分なりの視点からその本を読むことができたと思う。
- 初めは書評向きではないと感じたものの、読み進めるうちに様々なものが見えてくるのが面白い。
- 普段の読書とはまた違った読み方をしなければならず、かつそれを他者に客観的に説明し、批評するということの難しさを実感することができた。
- 書評のおもしろさに加え、難しさにも気づくことができたので、さらに良い文章が書けるように勉強し、たくさん本を読もうと思った。

Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

- 有名かつ大学生に人気のある作家さんが来れば、もっともっと盛り上がり来る人も増えるのではないかとと思う。
- 昔の文豪にゆかりのある人。

- 希望する講演会講師(敬称略・五十音順) -

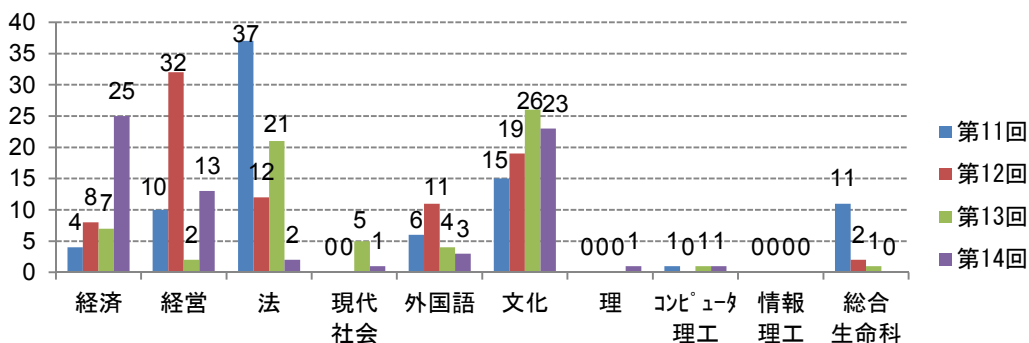
川上未映子・中村文則・東野圭吾・万城目学・又吉直樹・湊かなえ・森見登美彦



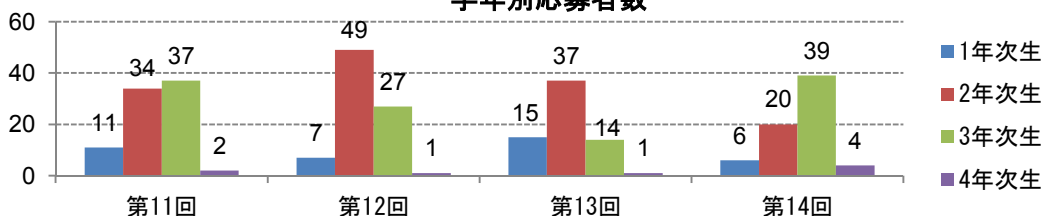


統計はこちらです。

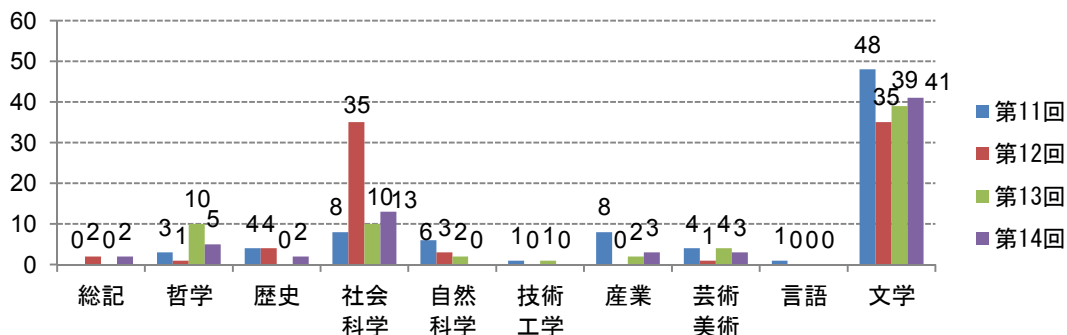
### 学部別応募者数



### 学年別応募者数



### 対象図書の分野別冊数



今回の応募者数は69名で前回から2名の微増となりました。学部別応募者数は経済学部・文化学部・経営学部の順となり、経済学部、経営学部からの応募が大幅に増加した一方で、法学部が大幅に減少しました。文系学部学生からの応募が大多数で、理系学部学生からの応募が少ない傾向は続いています。読解力や表現力は文系・理系問わず必要ですので、積極的にチャレンジしてください。

学年別応募者数は、例年通り2年次生・3年次生が多い傾向ですが、今回は4年次生からも4名応募がありました。過去には、2回・3回と続けて応募することによって文章力を向上させ、入賞に至っている学生もいます。興味をお持ちの方は、躊躇せず1年次生から応募してください。

対象図書の分野別冊数では、文学と社会科学に関する資料の選択が多く、自然科学、技術・工学、言語に関する資料の選択が0となりました。教員からの推薦、ゼミでの取組みによる応募が多いことが、分野の偏りの一因であると考えられます。対象となる図書は「図書館の蔵書」全体です。書評の執筆をきっかけに、これまで手に取る機会がなかった本とじっくり向き合うことは有意義な体験となります。次年度も幅広い分野からの応募作品をお待ちしています。



## <第14回 京都産業大学図書館書評大賞 概要>

### 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

### 応募要領（抜粋）

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
  - (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
  - (2) 文字数：1篇につき1,600字以上2,000字以内。応募原稿様式は図書館Webサイトから入手(マイクロソフト社Wordファイル)。
  - (3) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること(盗用厳禁)。
  - (4) その他：1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

### 応募実数

69名70篇

### 実施日程

応募期間：平成30年7月2日（月）～ 9月3日（月）

入選発表：平成30年11月29日（木）

表彰式：平成30年12月19日（水）

## <選考委員より ひとこと>

書評大賞に応募いただいた学生の皆さん、たくさんの力作をお寄せいただきありがとうございました。書評を書く過程で皆さんが体験されたであろう作者との対話は、大きな財産になることでしょう。またの挑戦をお待ちしています。(北澤)

書評の画竜点睛は本を手にとらせることができるかだと思います。この意味において選考をしながら読んでみたいと思った作品が多くあり、自分のReading Listが一気に豊かになりました。今年の冬は本を巡る旅になりそうです。(沈)

今回、はじめて選考に関わらせていただきました。「その本をぜひ読みたい」と感じさせる書評も多く、選考に苦労しました。久しぶりに読書にふけりたくになりました。(染谷)

質の高い書評が多く見られ、選考には苦労しました。苦労はしましたが、無批判にただ書籍を読むのではなく、自分なりに批評し、考えを発展させようとする人が多い事を嬉しく思い、そして力づけられています。(高谷)

書評や書評の講評も作品のひとつと考えて良いかもしれません。この読むことと書くことの連鎖が知の深まりを生み、他者と共感する楽しさを与えてくれることを改めて感じました。これからも書評の腕を磨き、本を通して新たな世界を知り、本を通して人と繋がる体験を増やしていきましょう。(中西)

今回の入賞作品の対象図書は、どれも読んだことのないものでした。私の読書傾向の偏りを教えてもらったとともに、敬遠していた分野の図書でも読みたいと思わせる書評の素晴らしさを改めて感じ、みなさんの力量に感心しました。(天笠)

応募作品に向き合うことは学生のみなさんとの対話であると考え、毎年この時期は、応募作品の書評をきっかけに本を手にとっています。応募された方、またその書評をきっかけに本を読まれた方との間においても交流が生まれることを願っています。(今井)

選考委員は応募してくれたみなさんの作品を評価しなければならないのですが、力作ぞろいで点数をつけることが本当に大変でした。どの作品もその本を読みたくなくなってしまいう力があるからです。入賞された皆さんは本当におめでとうございます。これからも本を好きでいてください。(鈴木)

今年も多くの良作と出会い、本を読んでみたくになりました。誰でも、面白い本や影響を受けた本を友だちや家族に薦めたいと思ったことがあるはず、というのが書評大賞の始まりと記憶しています。書評によって利用者の読書の幅が広がることを期待します。(中上)

数年にわたり審査させていただいていますが、年々応募作品に深みが増している様に思います。今回の応募作品も深みのある作品が多く、また私自身が知らない内容もあり勉強にもなりました。これからの作品にも期待しています。(山本)